天神竜と天空の巫女

FAIRY NAIL

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

４００年前、未来の全てを妹に譲りドラゴンになった少年が居た。

４００年という年月はドラゴンにとっては短く、人の心には、全て忘れる程永かった

目　次

プロローグ ―― 1
六神竜 ―― 4
木神竜と天神竜 ―― 9
天神竜 ―― 15

プロローグ

「ああ、ああ……そんな、何てこと…」
「グ、グランディーネ……？」
　純白の羽毛を持つ白いドラゴンが目の前の少女に信じられないといったような顔を向ける。褒められたかった少女は何かしてしまっただろうかと泣きそうになっていた。
「落ち着けよグランディーネ……それにしてもウェンディ、何時魔法を覚えたんだ？　まさか俺達の授業を見て？　すごいな、俺の妹は天才だ！」
「きゃう!?」
　ワシャワシャと頭を撫でられ悲鳴を上げる少女に少年はケラケラと笑う。
「ラファール。ですが……！」
「どちらか一人しか守れないなら、ウェンディを選んでくれ」
「それは……！」
「頼む、母さん」
「――――っ!!」
「血は繋がってなくても、この子は俺の妹なんだ」
「ならば貴方は私の息子よ」
　妹を優しく見下ろすラファールに、グランディーネはキッと睨みつけながら言う。
「そうとも、例えどうなろうと俺はあんたの息子だ。それは変わらない……ドラゴンと人間、どちらが上とは思わないけど、この子は人として生きてほしい」
「……？」
　今度は優しく撫でられ、ウェンディは首を傾げながらもニコニコ笑う。
「イグニールやメタリカーナ達も同じだからあんな方法を取るんだろ？」
「それは…」

「なに、結果として長生きできるんだ。待つのは苦痛じゃない……なんなら、俺が先にアクノロギア倒して平和な時代を作ろうかな！」
カラカラと笑う人の息子を前に、竜の母は寂しそうな顔をして鼻先を押し付ける。
「後悔は、しない？」
「さあ。俺はまだガキだし、未来の世界で後悔することもあるかもしれない」
「……必ず……必ず生きていて。アクノロギアの探知範囲は狭い。この大陸を出れば、きっと見つからないから」
「ドラゴンなら戦えって、言わないの？」
「ええ。生きていてくれたほうが嬉しいから」
その言葉にラファールも目を細める額をグランディーネの額に当てる。
「約束するよ。必ずまた、家族で会うう未来まで生き残るって」
「ええ……」

X777年。某大陸、某王国跡地……嘗て王城が建っていた丘に座した純白の竜は瞼をゆっくり開き空を眺める。
遠い遠い場所で、何かが来た。それも複数。
「漸く、漸く時が来たんだよ」
「黒魔導士」
空を見上げるドラゴンの側に何時のまにか黒髪の青年が佇んでいた。黒魔導士と呼ばれた青年は親しげに笑みを浮かべる。
「行ってあげるのかい？」
「……俺が？」
「会いたい人もいるだろう？」
「人？　人だと？　何故俺が人に会いに行かねばならない」
「……そうか」
ドラゴンの言葉に黒魔道士は悲しそうな顔で笑う。

「その様子じゃ、ナツのことも覚えてないか」
「……？」
「こっちの話だよ。それじゃあね、僕の古き友よ」

六神竜

『天神様、天神様……私はこの景色が大好きです』

毎日泥にまみれながら必死に山を登り、花を届ける少女はある日、夕焼けに染まる王都を見下ろしながら笑う。

その笑顔に安心を覚えた。■からドラゴンへと成り果てた身に笑い掛ける少女は■を思い出した。人を癒やす魔法を教え、人の為に何時も奔走する彼女を見守った。

彼女の国を守るために黒き翼から逃れた他のドラゴンとも戦い、血を浴び、肉を食い千切り、倒し、追い払い、時に死にかけながらも戦い続けた。彼女が死に、彼女の娘が次の代の巫女として学びに来て、何１０年と人を喰らうドラゴン共と戦ってきた。何時しか竜王の一角に数えられるほどに戦い続け、過去を振り返る余裕すらなくなり、巫女が今日も誰かを癒やした、旅人からこんな話を聞いたと報告に来ることだけが楽しみだった。好きな人と結ばれ新たな命を授かったと腹を撫でる彼女が、生まれてくる子にも魔法を教えてほしいと何度も繰り返した約束をかわした。

彼女が好きな国が、好きだった。責めてくる国を追い返し、人と人との争いに手を貸してしまうほど。

しかし、その力を恐れた人間達が軍を率い襲いかかってきた。

魔法を教えた少女を、ドラゴンに惑わされた魔女の一族最後の末裔として死体に変え、ドラゴンに罪を問いながら。彼女の夫すらも、その中にいた……。

気が付けば何もかも滅ぼしていた

瓦礫ばかりの国の跡地で、死体の匂いにさそわれた獣はしかし彼を恐れじきに去る。それでも誰も埋葬しなければやがて腐り、乾き、朽ちる。人の居なくなったそこを己の巣とし、瓦礫を積み上げ町の形を不格好に真似た。

それを遠慮なく踏み潰す人間の魔導師達、国の軍。何度も追い払ってやれば何時しか来なくなった、かと思えば定期的に魔導士がやってくる。エレフセリアがどうとか、クエストがどうとか……。

殺す気で来るものと会話などする気はない。故に解ったことは、彼等は自分の事を天神竜、六神竜と呼ぶということだけだ。

「……て、天神竜？」

１００年クエスト。

１００年間誰にも達成されなかった最難関のクエストにして、最古のクエスト。その内容は六神竜と呼ばれるドラゴンを封じるというもの。現在居場所が分かっている神竜の一体、水神竜メルクフォビアから聞いた神竜の一体の名に、ウェンディが反応した。

神竜の中で人間と共に歩むことを決め、白魔導士に魔力を消してもらうも利用され操られ、妖精の尻尾（フェアリーテイル）のナツ達に倒され魔力を失った彼は、自分を止めてくれたお礼にと自分が知りうる六神竜の情報を話したのだ。

「どうかしたのかい？」

「あ、えっと……私のお母さんが、グランディーネだったので」

「グランディーネ……天竜のグランディーネか？」

「知ってるんですか!?」

一年ほど前永遠の別離を味わった育て親の名にメルクフォビアが反応したのを見て思わず立ち上がる。自分が知らない母のことを聞けるかもしれないと思ったのだ。

「いや、直接は知らない。ただ天神竜グランは昔、自分の事を天竜グランディーネの息子だ、と良く言っていた。母を誇りに思ってたんだろうね」

「グランディーネの、子供!?」

「ナツに続いてウェンディまで!?」

「ぬぐ！」

実はつい先程、ナツの育ての親であるイグニールの子を名乗る炎神竜イグニアが現れたのだ。弱体化していたとはいえ、メルクフォビアを倒せたのは彼がナツに食わせた炎のお陰だ。しかしナツは街を平然と燃やそうとしたイグニアをイグニールの子とは認めたくない。

それはそれとして、ウェンディも自分にもいた兄弟姉妹が何者なのか気になっている。
「ウェンディは覚えてないのか？　あの野郎が言うには、ドラゴンの子育ては母ちゃんがするもんだって言ってたぞ？」
「すいません。小さい頃ですし、よく覚えてなくて……」
ナツ達第１世代の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）は４００年前の時代から時をこえてきた。その代償か、記憶の一部が欠落している。事実彼等は再会した時も互いのことが解らなかったし、特にウェンディは他の皆よりも幼かった。
「ドラゴンの寿命は長い。子育てだって、数十年に一度の周期で行うこともある。かぶらなくても仕方ないよ」
「……でも、グランディーネの息子なんですよね。じゃあ、私にとってはお兄ちゃんです。その竜は何処にいるんですか!?」
会ってみたい。話してみたい。そんな思い出メルクフォビアに尋ねるウェンディだが、メルクフォビアは済まなそうに首を降る。
「解らない。彼はその昔滅ぼした国を大地ごと浮かせ、この大陸を彷徨っている」
「国を！」
「浮かせた!?」
「……滅ぼした？」
「２００年ほど前だったかな。彼は一夜にして一つの国を滅ばし、自らを討伐しに来た軍を消し去り、やがて相手するのに嫌気がさしたのか、大地の一部を引き剥がし行方をくらませた」
それはつまり、国の人間を、己に挑んだ多くの命を奪い去ったということだろうか。人間と共存し、悪魔との決戦で人間のために戦ってくれたグランディーネの息子が。
「だから、僕が分かっている六神竜の所在は一つだけだ。木神竜アルドロン……３００年程前この大陸に来て、数十年程先にいたグランの領域を荒らし殺されかけたと聞く。その彼が眠り続ける地……死にかけたとはいえ、それも３００年前の話。もう傷は癒えているだろうし、君達の勝てる相手ではない。それでも行くかい？」

「あたりまえだ！」
　と、不敵な笑みを浮かべるナツ。
「わ、私も気になります！　天神竜について、何か知ってるかも！」
「そうか……僕が知る限りで良ければ、天神竜について話そう」
　メルクフォビアの言葉にウェンディを含め全員が気を引き締める。
「天神竜は大気を操り天候すら操作する。雷を直接放つことは出来ないが、落とすことはできるようで一軍を壊滅させる雷の雨を振らせたり、付与魔法を扱い自然現象を操る強力なドラゴンだ。大気だけと思えば痛い目を見る」
「天候も!?」
「更に治癒魔法を己にかけることもできる。恐らく六神竜の中で最もタフなのは彼だろう……そして、敵対したものは容赦なく滅ぼしたと聞く。それでも、会ってみるかい？」
「はい。その人が、グランディーネの子供なら……」

　ギルティナ大陸上空何処か。星々と月の光が地上よりよく見えるその高度に浮かぶ、風を纏った巨大な島。
　島の上には森も川も湖すら存在し、積み木のような形だけの町の中央に一頭のドラゴンが眠っていた。
「……セレーネか」
「久し振りだな、グラン」
　不意に目を開き、目の前に立つ着物姿の美女を睨む。
「何をしに来た、この国に近付くなと言ったはずだ」
　体を起し牙を剥くドラゴン。前足の指にも苛立ちから力が入り、地面がひび割れグランを中心に不規則な風が吹く。
「そう睨むな。同じ六神竜だろう」
「人間どもが勝手に名付けた呼び名だ。興味もない」
「しかしその名故に、エレフセリアが性懲りもなく討伐のために魔導士を送ってくる。今回は、聞いて驚け、アクノロギアを殺した滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）もいる」

「……アクノロギアを」
その名が出たことに多少反応すれど、しかしすぐに興味を失う。
「俺は奴より探知に優れている。奴が別の大陸にて滅んだことは知っていて。あれは大陸中の魔導士共が手を組んだ結果だ……その一部が来たからなんだってんだ」
「既に水神竜が力を失った。奴等の次の狙いはアルドロンだ」
「あのデカブツか。メラクフォビアは明らかに本来の力を出せていなかった。同じと判断し挑めば、大地の肥やしになるだけだ……それに、奴は俺が滅する」
「だろうな。その中にグランディーネの系譜も巻き込まれるであろう」
「……何？」
その名は、興味が失うことなどありえなかった。ギロリとセレーネを睨む目には先程以上の苛立ちが宿っている。
「因果なものだ。グランディーネの力を継ぐ滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）が、グランディーネの子たるお前を殺しに来るのだから」
「黙れ」
ゴゥ！　と突風が吹き荒れる。大気そのものが軋み、グランの魔力を付与されている浮島が震える。
「例えグランディーネから魔法を教わっていようと、人間風情に俺が殺されるものか。我が物顔で母の魔法を使うというのなら、この俺自ら滅してやる」

木神竜と天神竜

ギルティナ大陸最大都市ドラシール。
大陸の中央に位置する巨大都市。ナツ達一行はそこに木神竜アルドロンの情報があるというその街にやってきてみれば、情報どころかその巨大都市すらアルドロンの右手の甲に乗っているという巨大さを誇るドラコンであった。
両手、両肩、背中に5つの街を持つアルドロンは人間と共生しているように見え、封じるべきか情報を集めていると白魔導士に取り憑かれた少女トウカに操られた妖精の尻尾（フェアリーテイル）の仲間達と戦うことに。
白魔導士の目的はそれぞれの街に存在するオーブを破壊しアルドロンの力を消し去り、白魔導士の持つ白（ホワイトアウト）化の力で自我と魔力を奪い去ること。
ナツ達は仲間を取り戻すために戦闘、及びオーブの死守。そこに加わる第三勢力、ディアボロス。アクノロギアから逃れギルティナ大陸で生きていたドラゴンを殺し、その肉を喰らいドラゴンの力を得た第5世代の滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）。目的は神と謳われた竜の一角、アルドロンの肉を喰らうこと。ナツ達はメルクフォビアの住まう街でも戦ったがメルクフォビアが力を失っていたため彼等は去っていた。その次の獲物がアルドロンなのだろう。
彼等もアルドロンの力を封じるためにオーブを破壊しようとし、結果的には全てのオーブの破壊は成った。しかしそれは五神竜が一角月神竜セレーネにより与えられた偽の情報。オーブはアルドロンの力を封じる枷であり、それが全て消えたことによりアルドロンは竜を封じる街（ドラシール）に何世代と住まい何時しかアルドロンの一部に変えられた街の住人を吸収し復活した。
そして、オーブの守護神として想像されたゴットシードがフェアリーテイルに牙を剥く。
そのうちの一体……ドゥームがウェンディ、シャルル、ハッピー達の前に現れた。
「遊ぼー、遊ぼー」

「……貴方は、アルドロンの部下、なんですか？」
「一部だよ」
「じゃ、じゃあ……天神竜グランについて何か知りませんか!?」
「ウェンディ、こんな時に！」
　ウェンディの問いかけに人の姿に変身したシャルルが叫ぶ。ウェンディも謝りながらも、それでもどうしても母を同じくする神の竜が気になった。
「……グラン」
「え……」
　と、ドゥームがカタカタと震えだす。怯えているようにも、あるいは起こっているようにも見えた。
「グラン、グラン！　グラン！　テンペスタの守護竜！　人を守る竜か！　どうして君が、その名を!!」
「人を、守る？　て、天神竜は国を滅ぼしたんじゃ……」
　メルクフォビアから聞いた話と異なるドゥームの言葉に困惑するハッピー。ウェンディもどういうことか、と聞き出そうとした瞬間だった……
「うわあ！」
「きゃあ!?」
「っ!?」
　突如吹き荒れる突風。空を覆う分厚い雲は、その表面の形を絶えず変える。上空にも暴風が吹き荒れている。
「あ、嵐!?　なんで急に！」
「あ……あ……！」
　ドゥームがガタガタと震え、空を見上げる。雲を突き破り、何かが降ってきた。
「っ！　シャルル、ハッピー！　トウカさんと白魔導士を!!　ここから離れて！」
　ウェンディの言葉にハッピーは白魔導士に取り憑かれていたセレナというエクシードを、シャルルは白魔導士を抱え翼を広げその場から離れる。ウェンディも魔力の付きかけた体を懸命に動かし……

ゴバァァァァン!!
「うわあああああ!?」
「きゃあああああ!!」
「シャルル、ハッピー!」
降ってきたそれは、ドゥームを押し潰しアルドロンの巨体を大きく揺らす。土や木片が飛び散り衝撃が暴風となって街の残骸を吹き飛ばす。
「う、ぐ……な、何が……」
「こ、この魔力は……」
土煙の奥に見える巨大な影。大気を震わせる膨大な魔力。そして、数多の血の匂いが染み付いて解りにくいが、獣とも人とも違う独特の匂い。
「白い、ドラゴン……?」
白い羽毛のような毛で覆われた巨大な体。
染み付くはドラゴンの血。その奥に感じる、彼本来のものであろう匂いから感じる懐かしい匂いは……。
「グラン、ディーネ……」
前足と翼が一体化していた彼女と違い、独立した鳥のような翼を持つドラゴンは地面を睨み口を開ける。
「オオオオオオオ!!!」
吐き出される竜巻のような咆哮。それは街の残骸も背中の一部も、纏めて吹き飛ばした。

「あ、あれ……オイラ達、生きてる?」
「アームズ、ギリギリ間に合いました……」
自分達が生きていることに困惑するハッピー。その横で、ウェンディが風を纏いながら呟く。
「ウェンディ、あんた魔力が!?」
「あのドラゴンの魔力を分けてもらったの」
咄嗟に食らったのだろう。ナツがイグニアの炎を喰ったように、

ウェンディも同じ属性である風の、厳密には天の魔法を喰らうことが出来る。
　つまりあのドラゴンの属性は天。そして力を奪われたメルクフォビアや目覚めたばかりのアルドロンを超える力の波動。それが意味するのは……
「あれが、天神竜……」
「……」
「っ！」
　ギロリと睨まれ固まるウェンディ。天神竜グランと思われるドラゴンはしかしすぐに視線を下に向ける。アルドロンの体から無数に生えた枝がグランを貫かんと迫り、空を飛び回避するグラン。そのまま風を纏い移動しアルドロンの眼前で停止する。
「久しいなアルドロン」
「……グラン」

　その頃アルドロン内部。
「な、なんだ!?　どこいった!?」
　ゴットシードの長にして、アルドロンの脳に当たるゴットシードのアルドロンが姿を消しナツが騒いでいた。出口はない。炎を吐き出し破壊しようとするが、僅かに焦げるのみ。閉じ込められた。
「性懲りもなく目覚めたか……滅してやる」
「ほざけ、小僧」
　先程まで獣のようだったアルドロンの目に確かな知性が宿り、山より巨大な樹木が上空のグランに迫る。グランの翼が風を纏う。
「天神竜の暴乱！」
「ぐぬぅ!?」
　吹き荒れる風の刃は木々を切り裂き大地を破壊しアルドロンの巨体を僅かに浮かせる。アルドロンが口を開け咆哮を放ち、グランも迎撃するように咆哮を放った。
　一見すれば巨大なのはアルドロン。しかし、密度も魔力総量もグラ

ンが上。アルドロンの咆哮を突き破り右上の一部を大きく抉る。

「うぉ!?」

「きゃあああ!」

アルドロンに乗っていたフェアリーテイルのメンバーは文字通り大地を揺るがす衝撃に振り回される。直ぐにアルドロンから降りるが、吹き荒れる暴風と揺れる大地は天変地異すら容易く超える。

残った数人はゴッドシードと対面していた。

「力が弱まったな。分けていた力が破れたか」

「貴様を喰らい、消費した魔力を取り戻すまでだ」

「そのまま争いなさい、アルドちゃん、グランちゃん」

セレーネが口調を変えてその光景を観戦する。六神竜同士の争い。本来なら漁夫の利を狙うべき状況だが、弱っているアルドロンとグランの戦いなど、結果は見えている。ましてや常に餌が周囲にあるグランでは消耗もすぐに回復してしまうだろう。

それに、グランは他の六神竜とは違う。ドラゴン相手に対してより強くなる。

「それにしても、派手に戦うわねグランちゃん。アルドちゃんと喧嘩した理由忘れたのかしら?」

自らの領域に侵入して、当時の先代天空の巫女……子を成し、役目を継がせたばかりのグランの弟子の一人を踏み潰したアルドロン。その怒りを買い殺されかけた。

しかし当時未熟なグランもまた深い傷を負い追撃を行えず、再び動けるようになった時にはアルドロンは己の背に街を築かせていた。当時はまだ人の味方であったグランはそれ故手を出せなかったのだが、今のグランは既にアルドロンの一部となった街の住民はともかく、人間であるフェアリーテイルにもまるで配慮をしていない。

「アクノロギアと同じ。人として生きたことを忘れ、ドラゴンになったのね……ならばドラゴンの時代を長引かせる、私の敵だ」

天神竜

増大する魔力を抑えるためのオーブを作り、溜まった魔力を下に生み出したゴットシード。

フェアリーテイルの魔導士と戦わせていたそれらを再び取り込む。全員やられかけていた。

「養分ごときが、力をつけたようだな。だが、今は貴様だ」

「吠えていろ。俺から逃げ出した事すら忘れたか」

「殺されかけたことを忘れたが、半端者めが！」

ゴッ！　と額がぶつかり合う。体格差から普通に考えればアルドロンが勝るはずだが、グランが吹き飛ぶもアルドロンの体も大きく仰け反る。

「デカくなったのは図体だけかぁ!!」

天神竜の鉤爪！

風を纏い振るわれる爪。滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）ならば似たような技はあるが、威力は桁違い。

山より巨大なアルドロンの体を切り裂きそこの見えぬ渓谷を生み出す。

「グオオオオオ!!」

アルドロンが叫ぶと同時に剣の如く鋭い枝が無数に降り注ぐ。グランは暴風を纏いそれら全てをそらすと、今度は木の葉の竜巻が襲いかかる。

「!!」

天空を統べるグランにとってはただの目隠し。しかし、それでいいのだ。アルドロンの胸の穴から吐き出された巨大な木の杭がグランの体を抉る。

バランスを崩し落下するグランを地面から生えた巨樹が捉え、締め付ける。

「!?　グランさん!?」

「今は自分の心配をしなさい！」

例え記憶がなくとも同じグランディーネの子として、思わず叫ぶ

ウェンディ。絞め殺されたグランの体は、解けて風になった……。
「……え？」
「ドラゴンって死ぬと属性になるのかぁ!?」
「違う……あれは、風に自分の魔力と人格を付与（エンチャント）した分身……」
ただの風に、ドラゴンと渡り合うほどの力を付与（エンチャント）していた。なんて滅茶苦茶な魔力……ならば、本体は？
「っ！」
上空の雲が渦を巻く。その中央に現れたのは先程より一回りは大きいドラゴン。膨大な魔力が雲に流れ込み、ゴロゴロと雷鳴が唸る。
『天神竜は大気を操り天候すら支配する。雷を直接放つことは出来ないが、落とすことはできるようで一軍を壊滅させる雷の雨を振らせたり、付与魔法を扱い自然現象を操る強力なドラゴンだ』
メルクフォビアの言葉を思い出す。これが、その力……天を支配する神の御業。
……なんて滅茶苦茶な。
「落ちろ」
全ての雷が集結し、アルドロンより巨大なグランを形作る。恐らく精密な付与（エンチャント）が出来ないのだろうが、力任せで行うそれがまさしく災害。
雷竜がアルドロンを飲み込んだ。
ビシャアアアアアン!!　と大気が引き裂かれる音がその場の殆どの意識を奪う。
「カ、ァ……」
アルドロンが雷を地面に流すために咄嗟に張った根がボロボロと焼け崩れる。
「終わりだ」
ゴッ！　と流星のように落下しアルドロンの頭を破壊したグラン。アルドロンの巨体が倒れ地面が揺れる。
同じ六神竜。されど目覚めたてとずっと起きていたモノでは力の差が圧倒的すぎる。

「あ、あの……」
「ウェンディ!?　駄目よ、近づいちゃ！」
「危険だウェンディ～！」
「さがれさがれ！」
　それでも、意を決して声をかけるウェンディ。シャルルやギルドメンバー達が止めようとするも、ウェンディは駆け寄る。と……頭部の半分を失ったアルドロンが起き上がった。
「まだいきて!?」
「しつこい……」
　グランが忌々しげに唸り、しかし止まる。次の瞬間、アルドロンが内部から吹き飛んだ。
　巨大な火柱が中から焼き払ったのだ。
「あれは……ナツ！」
　炎の中から現れたのはナツだ。その膨大な炎にグランは目を細めた。
「イグニアの兄弟か……」
「俺の兄弟はゼレフだ！　……って、うおお!?　新しいドラゴン!!」
　グランの言葉に炎を吹き出しながら叫んだナツは新たなドラゴンの姿に直ぐ様臨戦態勢を取り……
「ま、待ってください!!」
「!?」
　ウェンディがグランとナツの間に立つ。
「あの！　グランさん、ですよね？　グランディーネの子供の……私はウェンディって言います。私も、グランディーネに育てられて……だから……」
「エレフセリアに言われ、俺を滅ぼしに来たか」
「……え？　あ……！　ち、違うんです！　話を――!!」
「死ね」
　口内に溜まる魔力。自分達など一瞬で消し飛ばすその魔力に抗うすべは……ない。
「刃竜の裂哮!!」

と、無数の斬撃がグランを襲う。
「アルドロンの肉は木になってしまったが、いただくぞ貴様の血肉!!」
「マスターに届けるっちゃ」
「大人しく我等の糧になってもらうぞ、天神竜よ」
「彼奴等!!」
現れたのは3人の滅竜魔導士(ドラゴンスレイヤー)。竜の肉を食らい、竜の力を得た竜喰らい(ドラゴンイーター)達だ。
「……鬱陶しい餓鬼共だ。俺を喰らい力を得る？　何時の世も、自分たち人間が全てを決めると思い込みやがって……身の程を弁えろ」
天神竜の晩餐
「「――――――!!」」
音が消えた。
音とは空気が振動し生まれるもの。そして、天の竜は大気を喰らう。辺り一帯の大気を食い尽くしたのだ。
真空となったその空間にて魔導士達が倒れる中グランはウェンディを一瞥し前足を振り上げ……。
（……イグニアか）
遠方から向けられた殺気に気付く。この中に獲物と定めた者がいるのだろう。手を出すな、ということだ。
奴と敵対してまで殺すほどの価値もない。グランはその場から飛び去った。